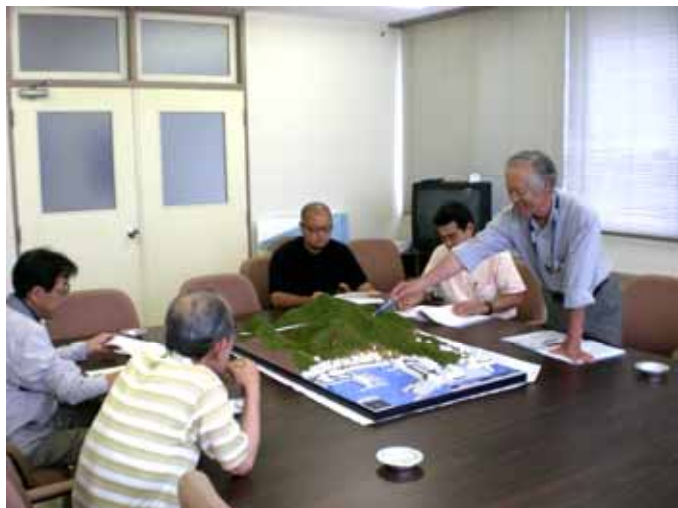


町営第2種保田漁港 農山漁村活性化プロジェクト支援交付金の取組み

都市と漁村のふれあい構想「漁港と地域考えて活性化を！」



漁協活性化チームの協議の様子

◆地元の意見
保田漁業協同組合では「ばんや」の利用客からニーズを把握したり、多くの視察を受け入れ漁港間での意見交換などをしたりと積極的に都市との交流を行ってきた。そのような状況の中で活性化法が制定され、漁港という小さな枠に囚われず、漁港と地域の活性化という視点から計画を立て、行政と事業化を目指しています。今では、漁業協同組合の中に活性化チームを作り、運営方法や収支計画などを見極める作業や行政と連携して、さらなる活性化を計画しています。



魚食普及食堂ばんやの人気メニュー



交付金で建設された「第3ばんや」の様子

◆現状と課題

当町の人口は昭和35年をピークに年々減少傾向にあり、年間約1%の減少が進んでいる現状である。その要因として就業構造の変化がある。数値で見ると昭和40年の産業別人口割合は第1次産業52.2%、第2次産業11.3%、第3次産業36.5%となっていたが平成17年には第1次産業21.4%、第2次産業17.3%、第3次産業61.3%と第1次産業と第3次産業の比率が逆転しており、第1次産業は後継者不足、第3次産業は就業の場を求めて若年層が都市部へ流失している現状がある。

この状況下において、農業・漁業の第1次産業では価格の低迷や燃料の高騰、担い手の減少や高齢化等など産業の根幹に関わる多くの問題や課題を抱えており、その対策として「就労環境の改善」「高鮮度で良質な農産物、海産物の提供と就業者の所得向上」「観光への取り組みによる地域の活性化」を図ることや若年層の流失を防ぐための就業の場を確保することが急務である。

特に観光産業は、平成19年7月に高速道路が開通したことにより、利便性の向上が図られ、団体客が訪れる機会が多くなってきた。しかし、本地区は首都圏から日帰りが出来ることから滞在による経済的な波及が望めなくなってきた現状があり、如何に滞在者を増やすかが大きな課題である。

◆町の特徴

鋸南町は房総半島の南西部に位置する人口約9,800人の町である。前浜は東京湾口に面し、豊かな漁場と自然に恵まれている。気候は温暖で、最高気温約33度、最低気温約-3度、年間平均気温は17.7度である。

産業は農業・漁業・採石業の第一次産業が盛んであり、農業はほ場整備の農地において、二毛作による取り組みや花卉・野菜栽培が盛んに行われている。一方、漁業は岩井袋・勝山・保田漁港を有し、豊かな漁場は中高級魚介類に恵まれ、古くから沿岸漁業の盛んな保田では刺網・定置漁業が主に行われている。

都市との交流面では、保田漁業協同組合を中心に都市と漁村の交流に早くから取り組み、伊豆半島や大島へ行くまでのプレジャーボートの寄港地としての地位を確立し、海の駅として年間200隻以上の利用があるまでになり、魚食普及食堂「ばんや」と共に都市漁村交流の先進地域として多くの視察を受け入れている。

また、観光は、鋸山を始め、日本水仙による早春の花観光や地域住民と協働によるエコガーデンを推進しており、頼朝桜の植栽などを行い、年間約70万人の観光客が訪れている。

◆活性化の取組

南房総の豊かな自然を生かして営んできた農業・漁業は、不安定な所得体系や就労環境の未整備などから若年層の就業への魅力を損なう状況にあり、後継者不足から生じる活力の低下や東京湾内の開発と海流の変化による漁獲高の減少、魚価の低迷などにより、販売手数料では組合経営が困難になるとの考えから、漁協しか持ち得ない海や水産資源を活用して一次産業と三次産業を合わせた「海業」を平成7年から取り組んだ。それが魚食普及食堂「ばんや」であった。海洋レクリエーションの利用増加に伴い、水産業とその地域に対する理解と関心を深めるため、親子で楽しく安全に海で遊べる施設づくりとして遊覧船の運航やプレジャーボート（ビクター）の受け入れを図る。一方、日本水仙の里で知られる「江戸」という地区に、桃やアジサイ、ツツジを植栽し、従来からの漁港という「点」から「面的」な視点で取組みを実施している。水産業の振興では、漁業者の高齢化が進んだことから就労環境の改善として浮桟橋を国の支援を得て実施したほか、組合の利益を水産資源の放流や育成、燃料の事業分担当、漁業高齢者への配食サービスなどの福利厚生も実施している。

◆事業の紹介

魚食普及食堂「ばんや」はこれまで、水揚げロツトがまとまらなると販売できない水産物を調理して食べさせることで販売を可能とし、資源の無駄が無くなった他、魚価に付加価値を付けることで価格の低下を抑え、漁業の安定経営に貢献している。その他では就業の場として地元スタッフを雇用、漁業者の一人世帯や高齢者世帯への配食を行い地域の活性化や漁業者の福利厚生に寄与している。

今回の事業で更に利用者へのニーズであった待たずに食べられる予約制や観光バスの受け入れを行い、観光会社と連携して観光ルートの模索を行うなど地域活用を推進している。

◆事業の効果

4月26日に「第3ばんや」がオープンしてから6月末までに受け入れたバスの台数は76台、人数は延べ4364人になります。5月の対前年比（6月末集計のため）は124%となっている。「第3ばんや」を利用した人たちは「観光バスの利用でくるので、中々利用出来なかった。美味しく新鮮な魚が食べられて嬉しい。」や「これまで一時間待たないと食べられなかったが予約出来ることでスムーズに食べられ、予定がたやすくなくなった。」との声が聞かれた。